

平田オリザ × 横内謙介 × 鴻上尚史

【第1部】コミュニケーションと演劇

——あるいは 静かな演劇VSにぎやかな演劇

にぎやかな演劇をリードしてきた鴻上尚史と、スーパー歌舞伎の台本も手がける横内謙介が、静かな演劇を生み出した平田オリザと徹底対決。それぞれの劇作へのこだわりと、プロとして生き抜くための戦略とは？

静かな演劇に「太刀浴びせたい!？」

鴻上——今日、なぜおふたりをお呼びしたかと言いますと、この講座の一つ目のタイトルは「コミュニケーションと演劇」。僕も何冊かコミュニケーションの本を出しているんですが、平田さんもコミュニケーションの本をたくさん書かれています。それとサブタイトルの「静かな演劇VSにぎやかな演劇」。今一番にぎやかなのは誰だろうって考えて、スーパー歌舞伎の『ワンピース』を書いた横内さんを。コミュニケーションに関しては、横内さんも小学校で。

横内——はい、授業みたいなことを。でも「コミュニケーションと演劇」のほうは、平田さんが喋ればだいたい終わるんじゃないかな。

鴻上——オリビー、ずっとそう呼んでいるんですが、よくこのサブタイトルで出てくれましたね。横内さんと呼んだのは、もし、俺がオリビーとヒートアップしたら、「まあまあ」と入ってもらおうと思ったのもあったんです。それなのに、横内さん、昨日からヒートアップしててでしょ。

横内——昨日、鴻上さんとすれ違った時に「明日、僕命かけます。たぶんボロ負けしますけど」と言ったん

です。今まで平田さんとはコミュニケーションの話をし

ようが、演劇の話しようが、最後はなんだかかわからないけど、すごく納得させられて「ありがとう。また

教えてね」って終わる。「明日こそ太刀必ず浴びせませうから、とどめは先輩刺してください」って言ったら、「何を言ってるんだ、君はなだめる役なんだよ」って言

われて。

鴻上——いいですよ、僕がシフト変えますから。「まあまあ」って。

横内——にぎやかな演劇と静かな演劇については、ずっと平田さんと話してみたかったです。

鴻上——実は、僕もこのテーマについてオリビーと話すのは初めてなんです。

横内——だから「コミュニケーションと演劇」はあんまり。

鴻上——どうでもいいの？

横内——ちょっとでいいんじゃないかな。

鴻上——じゃあ「コミュニケーション」について聞きたい方は、『わかりあえないことから』（平田オリザ・著）と『コミュニケーションのレッスン』（鴻上尚史・著）を

読んでいってもらって。

平田——そろそろ始めましょう。

満漢全席と豪華な手打ちそば

横内——僕らが芝居始めた時は、アングラのしっぽがまだあったでしょ。それから小劇場ブームですよ。鴻上さんと野田さんが作ってくれた世界があって、とにかく演劇というのは楽しい、お客さんがいっぱい集まるものだった。鴻上さんなんか筆頭だと思っただけ、劇場が文化祭のように盛り上がった。お客さんは普通にデートで来てたもんね。その後、バブルが弾けて。その時に平田さんが現れたんです。

平田——はい。

横内——1カ月前、僕らはここ座・高円寺で芝居やってたんです。つかこうへい追悼公演。つかこうへいだから、燃える、泣ける、キマるをやらなきゃいけないんですよ。一番上の俳優は54歳なので、絶叫すると声が枯れるわけ。それでも、強引に立ち回りして、腰痛くしたり、足挫いたりして。でも、どの新聞にもうちの記事は1行も出なくて。同時期に吉祥寺シアターで平田さんがやっていたのは大新聞に、平田オリザ8年ぶりの新作、って出て。僕らが汗だくで傷だらけのときに、汗かいてないでしょ？ 怪我人出てないよね？ 声も枯れませんか？



平田オリザ
劇作家、演出家。劇団「青年団」主宰。
こまばアゴラ劇場芸術総監督。東京藝術大学
特任教授、大阪大学客員教授、四国学院大学
学長特別補佐。1995年『東京ノート』で岸
田國士戯曲賞、2007年モンブラン国際文化
賞などを受賞。2011年フランス文化省シヴェ
リエ勲章叙勲。©青木司

平田——枯れない。

横内——料理なら俺は満漢全席が一番いい料理だと思っ
て、予算もないのに前菜からデザートまでやって、途
中熊の手まで出すんですよ。それなのに、平田さんは
素うどんですよ！ この費用対効果の悪さというか、
労力みたいなものをね、どういう気持ちで僕らを見てい
るんだろう。馬鹿なことやってんなと思ってるのか、聞
いてみたかったの。

平田——うちもね、今回とかたくさん出てるんで。20
人ぐらい。だから大変なんですよ。楽しようと思えば、
3、4人でもいいんだけど。そんなに費用対効果変わら
ないと思うけど、どうですか？

横内——まず、素うどんと思っつかどうか。
平田——素うどんとは思わないけど、すごく豪華な手
打ちそばを作ろうとは思ってます。薬味なし。

横内——僕が書いているコミュニケーション論とオリビー
の書いているコミュニケーション論はすごい似てるの。わ
かりあえないところから始めようとか。人間に対する認
識は似てるのに、つくる芝居が違うのはどうしてだろ
う。

横内——そこなんです。演劇人として正しいこと言っ

てるなあって思うんですよ。感心したのが、彼の『都
市に祝祭はいらない』というエッセイで、必要なのは聖
堂である。そういう自分と向き合う場所が必要なので
あって、祝祭の場はいらないってあって。

横内——俺は、演劇は神なき祝祭である、って言って
デビューして、オリビーが、都市に祝祭はいらない、っ
て。

平田——あれは鴻上さんを意識して、そう言えば自立
つかなって。

静かな演劇が生まれた経緯とは？

横内——ここで平田オリザがなぜこうなったか教えて
あげましょう。僕は平田君がにぎやかな演劇の台本書
いてたの、知ってるんですよ。おそらく野田秀樹さんや
寺山修司さんの真似から入ってるはずなの。ところが、
ある時からアレが始まったんですが、はつきり言いま
す。これはこの料理人の、家業、だからなんです。僕
は、劇場が芝居を書かせると思っつて、演舞場もスズ
ナリもだいたい、それぞれのお客さんを想定できるじゃ
ない？ 彼はね、アゴラ劇場が実家なわけよ。わかる？
当時、鴻上さんと野田さんは動員5万人ぐらいだった
よね？ でも、平田オリザはそれを追っかけるわけに
はいけなかつたんです。なぜならば、実家がアゴラだか
ら。

横内——それ『情熱大陸』のナレーションなの？

横内——俺の中でできあがってたんだ、ストーリーが。オ
リザ氏は負けないぞと思っただけで、いや待て、俺は
この空間で何とかしたいといけない。30人の立ち回りな
んでできないものね。危険だよ、槍なんか持ったら。自
ずと料理は決まってくるわけですよ。でも毎日100

人入れても食えないですよ。

そこで、彼は助成金の存在に気が付いた。助成金が
ない時代からやがてそうなるって彼は予言してましたか
らね。その通りになってるから、すごいなって思うんだ
けど。そこに若者たちは集まった。芝居も尖がっていつ
て世界に通じるもの生んでいった功績はあると思うけ
ど、やっぱり若者が客を呼ぶという夢を見ない。チケット
ト代で生きていくみたいなことが薄れていったよね。そ
れは何と言おうが平田オリザの罪として糾弾したいな
と。

平田——はい……。

横内——これでトーク終わりじゃないから。まだ一太刀
浴びせてないから。

平田——最後の部分はほんとにそう思うんです。僕は
口を酸っぱくして客入れるって言うし、僕はすごくチ
ケットを売るほうだし。客なんか入らなくてもいいって
言う若手の演出家もいるんですけど、それはよくない。
制作者とか他のスタッフに失礼だろうと。確かに人間
は助成金とか出ると甘えるのはわかるんです。でもそ
れは僕の責任じゃないと思っつんですが。

お客さんが7万人に達した理由

横内——静かな演劇が出てきたのには、にぎやかな側
にも責任があつて。何かあると正面向いて叫んでか
音楽かけて、踊り始めるっていうさ。お前らの踊る動
機は何なんだ、と。だから、劇的なことは舞台の袖の
奥で起こり、舞台の上では起こらないっていう演劇が出
てくる意味はあつたとすごく思いましたよ。

横内——鴻上さんにも聞きたいんだけど、ものすごい
数のお客さんを入れていたじゃない。あれは、なんであ



横内謙介

劇作家・演出家。「劇団扉座」主宰。
1982年、早稲田大学在学時に劇団「善人会議」を旗揚げ。'93年「扉座」と改名。'92年、『患者には見えないラマンチャの王様の裸』で第36回岸田國土戯曲賞。'99年『新・三国志』と2015年スーパー歌舞伎Ⅱ『ワンピス』で大谷賞を受賞。

んなにお客さんが入ったの？

鴻上——あれは、ものすごく周到に計算したからですよ。

横内——どう計算したの？ 僕らが真似しようとしてもできなかった。みんなが真似したら演劇シーンは変わったと思うんだよ。それほど、夢の遊眠社、第三舞台、の後が続かなかつたからね。

鴻上——僕らの戦略は言語化すると難しいんだけど、一回ハマったら次も観たくなるようにするにはどうしたらいいかってことをやったのね。僕は劇団員を10人以上持つ気がないのね。第三舞台、もほぼ8人。8人だとお客さんは鼻肩の役者が出始めるのね。鴻上のことは大嫌いだけど、誰々のことは大好きだから観に来るんだって、そうして増えればいいんだって役者に言ってた。俺しかチャンネルがないのはダメなんだ。そうやって、第三舞台の動員は7万人ぐらいいったんですよ。

でもそれにはしつぱ返しがある。暗転の中、寛(利夫)にピンスポ当てただけで客席に笑いが始まるわけ。すごくまじめな新作なのに、寛が出ただけでワーッとやる。そうすると、初めて来たお客さんは「なんちゅうぬるい客を相手にしている劇団なんだ」って思うんだよね。だから次に行くためには店じまいするしかない

なつて思ったのね。

横内——平田さんのところは、平田オリザ、だけでやっているよね。

平田——そうですね。

横内——芝居の要素って「戯曲と役者と客」と古代から言われていたと思うんですけど、そこはどうですか？

平田——それはもう、俳優には最初からそう言うてるんで。

鴻上——どう言ってるんですか？

平田——駒だつて言ってるんで。

鴻上——温厚な顔して、すごいこと言うでしょ。

平田——それですごいみんなから批判されたんで、最近、俳優は考える駒である。って。鴻上さんみたいに8人と人生かけてやっていこうと言うのは選択としてあると思うけど、よっぽどのことですよ。

鴻上——よっぽどだよ。24時間、役者のことばかり考えてたからね。夢でも考えて、夢の中で解決方法見つけてた。

プロとして生き抜くための オリジナリティー

横内——作家の喜びつてき、いい台詞を書くっていうのがあるじゃない。「人生は歩き回る影法師」とかさ、「あなたはなぜロミオなの？」とかさ、書いてみたいとは思わないの？

平田——ああ、それはいいですね。僕の中に上手い戯曲っていうのは一応あつて、その構造みたいなのができちんとできた時は快感があるんですけど。

横内——平田さんの戯曲の中から名台詞ってとりにくいもんね。

平田——ないですね。そういう台詞じゃないのに、お客さんが爆笑したり涙ぐんだりするほうが、いい台詞なので。

横内——これはもう負けの言葉だけど、にぎやかな演劇に励ましの言葉を……。

鴻上——ちょっと待て、なんでいきなりそこへ行くの、あなた。今、切腹しただろ！

横内——自分でも変なこと言ってるなと思った。ところで、さっきの僕の仮説は合ってる？ 家業説。

平田——半分は合ってると思うんですけど、プロでやっていこうという時に、オリジナリティーがなきゃいけないと思つたと思うんですよ。鴻上さんや野田さんの真似してたら目立たないし。

鴻上——この中にも劇作家志望の人いると思うけど、趣味で一生書き続けるって人と、血を吐いてでもプロになるぞつて違いだと思つたよ。横内さんのボヤキだつて芸だからね、一時間聞きたいよ。最後は「平田さん、ありがと」って帰っていく、いい芸だよ。オリピーも名づけはキャッチーなんだよ。決め台詞には興味ないのに、現代口語演劇、なんてさ、ものすごくキャッチーだよ。でも、現代口語じゃないじゃん。30代から50手前ぐらいの都会のインテリの語ってる言葉でしかないじゃん。

平田——わかるとると思うけど、言つたもん勝ちなんで。

鴻上——エッセイはキャッチーなのに、なんで戯曲は「ああ」「うん」になるの？

横内——消すの？ 名台詞できちゃつた、やめようって。

平田——稽古場で調整することはあります。ちょっと盛り上がりすぎ、みたいな。

(記録・中田満之／文責・瀬戸山美咲)